

薬物依存からの「回復」における「棚卸し」と「埋め合わせ」

—ダルクメンバー／スタッフの「回復」における困難とその克服 (1) —

埼玉県立大学 相良 翔

1 目的

近年ダルク (DARC : Drug Addiction Rehabilitation Center) などの薬物依存者の「回復」を支援する組織に対する注目が高まっている。これまで報告者はダルクメンバーやスタッフの「回復」にむけた実践やそれを通じた「回復」にむけた歩みの様子を描き出してきた (例えば、ダルク研究会 2013)。その中で、本報告では「棚卸し」と「埋め合わせ」と呼ばれる「回復」に向けての実践について社会的に考察する。棚卸しとは、その依存者自身の「性格上の欠点」や「短所」について、他者の協力を得ながら把握することである。そして、埋め合わせとは「性格上の欠点」や「短所」がゆえに傷つけた人々に対して、そのつぐないを直接行うことである。

報告者を含め、薬物依存からの「回復」について、薬物依存を「病い」とする観点から論じられることが多かった。しかし、この棚卸しと埋め合わせは「病い」という観点からでは把握できない特徴があり、またダルクにおける「回復」を考察していく上で重要なものである。メンバーやスタッフが「回復」に向かう道のりにおいて、棚卸しや埋め合わせがどのような影響を与えるのか、メンバーやスタッフの「語り」に焦点を当てて考察する。

2 方法

報告者はこれまでダルク研究会による共同研究の一環として大都市圏にある Xダルクと Yダルクにおいて 2011 年 4 月から参与観察やインタビュー調査を続けてきた。調査対象となったダルクとは調査倫理ガイドラインの取り交わすなどの倫理的配慮を行っている。

主なインタビュー対象者は 2016 年 4 月時点で 31 名であり、全員が男性である。初回インタビュー時における内訳は、入寮者が 19 名、すでに退寮していた者が 3 名、スタッフが 9 名であった。2011 年 4 月から 2016 年 4 月までの間に、調査対象者 1 人に対して、1 回から最大 23 回のインタビュー調査を行っている。今回は棚卸しと埋め合わせを行った (行っている) ダルクメンバーの語りを中心に分析・考察を行った。

3 結果

まず、棚卸しと埋め合わせによってメンバーやスタッフが「回復」に関する語りの展開をすることが困難になる可能性があることが示された。それは「棚卸しと埋め合わせによる具合の悪化」、「自身の欠点や短所によって生き延びてきたという認識」、「埋め合わせを行う人物に接触できないこと」、「自分を傷つけた人物に埋め合わせを行う必要性がわからないこと」、「埋め合わせを行うべきであるとは思いますが、その責任を感じられないこと」などの理由からもたらされるものであった。

その上で、棚卸しと埋め合わせによる「回復」に関する語りの展開の困難さがいかに回避されているのかを確認した。その回避の根底には、スポンサーと呼ばれる聴き手などの存在が重要視されており、そのスポンサーとの間で棚卸しを調整・修正し、埋め合わせに繋げていることが示された。

他方、棚卸しと埋め合わせにより、「回復」の規範化が行われる可能性が示唆された。「回復」の多様性を承認するダルクにおいて、特定の「回復」のあり方に集約しようとする「回復」の規範化はその多様性を縮減する可能性を持つ。それゆえにダルクは棚卸しと埋め合わせによる「回復」の規範化を回避する条件を備える場所であることが考察された。

参考文献

ダルク研究会編著 (南保輔・平井秀幸責任編集), 2013, 『ダルクの日々——薬物依存者の生活と人生』知玄社。